

国際ワークショップ「現代湾岸諸国におけるグローバル化と政治・経済体制」報告
アラブ首長国連邦における部族的紐帯の今日的意味
～ 90年代のアブ・ダビ首長国を中心に ～

平成 21 年 9 月 26 日

大野元裕

本発表においては、現代のアラブ首長国連邦における部族の政治・経済的意味を考察することを主眼とするが、特に、90年代前半のアブ・ダビ首長国を主たる検討の対象とし、この時期において伝統的な部族の紐帯を以下に捉えるべきかを議論していきたい。なお、主要な政治・経済分野における部族別の勢力や要人等が取り上げられるが、これらは、91-92年にアラブ首長国連邦で発行された新聞、雑誌、官報、会社案内およびアブ・ダビ首長国内で発表者が実施したインタビューを元にした。

1. 部族の現代的意味再考の意義

伝統的な系譜学にしたがえば、部族とは共通の祖先から分かれた血を共有する人間の集団ということになる。ヒッティの場合、遊牧民を部族の典型と見て、以下のように説明している。

各天幕が一家族を示し、天幕の宿営地が一つのハイイ（天幕団）を形成し、ハイイの構成員が一「氏族（カウム）」を構成する。血筋の近い多数の氏族が結合して「部族（カビーラ）」を結成する。氏族の成員全部が血統を一つにする者という意識を持ち・・・虚構であれ、真実であれ、血の関係が部族組織を固めさせる要素を成している。

ヒッティは、虚構である場合も含めた「血」のつながりを強調する一方で、この記述が示すとおり、部族の社会性も見ているⁱ。アラブ世界において、一般に部族の重要性が語られる時、それは単なる血の記憶を指すのではなく、それが現実の世界において機能する社会性や政治的・経済的意味を指しているのであろう。

トルーシャル・オマーンと呼ばれた地域の諸部族は、「血」の記憶としてカフターン（Qahtan）およびアドナーン（Adnan）というアラブの二つの大きな流れにまで遡る記憶を共有している。ノアの孫であるカフターンの子孫もしくはヤーマニーと呼ばれる南の方の人々と、アブラハム（イブラヒム）につながるアドナーンもしくはその孫のニザール（Nizar）の子孫である北からやってきた人々という歴史的「物語」を信じている。

この共有された想いは、この地域のすべての部族を巻き込んだ18世紀初頭に始まる対立が、カフターンとアドナーンの対立という構図の下で進んだために、このトルーシャル・オマーンと呼ばれた地域で特に強化されたと考えられるⁱⁱ。現実には、ヒナーウィ連合に参加した部族が全てカフターニーではなく、逆にガーフィリー連合に参加した全ての部族がアド

ナーニーであったわけでもないどころか、一部の部族は連合から寝がえり別の連合に付いたりもしたのであったⁱⁱⁱ。その一方でこの地域の人々の多くは、現在でもどの部族がガーフィリーで、どの部族がヒナーウィカを知っているのである。

それにもかかわらず、このような歴史的な大部族連合関係は、現代において必ずしも決定的な意味を有しているとは考えにくい。それどころか、かつてヒナーウィとガーフィリーに分かれていた部族同士の方が、その後、密接な関係を築いた例も少なくないのである。そうだとすれば、カフターン、アドナーンという概念もヒナーウィおよびガーフィリーという部族連合も、現代においては、前述のような社会的・政治的・経済的意味でさほど重要性を有していないことになるろう。

部族を表記する言葉には、カビーラ、アシーラ、カウム、アール、ファラア、ベイト等があり^{iv}、それらは部族の大きさによってある程度分類される。時にカビーラは、その下により小さな下部構造を有する。前近代的意味合いでいえば、部族はしばしば排他的なテリトリーもしくは領地、水源を保有し、あるいは農園や漁業権を保有してきた。特定の部族を他の部族と区別する上でより明確なものは、ラクダや家畜に行う焼印（ワスム）および戦闘の際の「鬨の声（アズワ）」かもしれない。ワスムおよびアズワを共有する範囲が部族と考える上で最も顕著な特徴かもしれない^v。

伝統的な部族概念は、以上のような特徴を有するが、近現代においては、これらの枠組みを超えたつながりがより重要な意味を有しているように思われてならない。

2. 首長国の成立と部族社会

社会的に意味を有する部族構造や部族間の紐帯は、昔から固定的であるとは言えない。たとえば、ブライミー・オアシスの部族がそうである。ブライミー・オアシスは、現在の阿布・ダビ首長国とオマーン国境付近に位置し、伝統的にオマーンの政治的影響を強く受けてきた。ガーフィリー、ヒナーウィの分類で言えば、この地域の多数派であるナイーム、アール・ブー・シャーミス^{vi}およびバニ・カアブはガーフィリーである。彼らの部族的連合・紐帯は、伝統的には、オマーンのスルターンへの忠誠、あるいはガーフィリーとしての連帯として説明されてきた^{vii}。しかしガーフィリーの紐帯にもかかわらず、彼らは強い独立性を有しており、政治・経済状況に応じて伝統的なくびきを容易に離れた。たとえば、ブライミー・オアシス付近におけるイラク石油会社（IPC）との契約の主体が、ナイーム、アール・ブー・シャーミスおよびバニ・カアブの主張にもかかわらず、オマーンのスルターンであることが決定されると、彼らはガーフィリーであるにもかかわらず、オマーンのスルターンから距離を置き、阿布・ダビ首長の弟、ザーイド・ビン・スルターン（後の UAE 大統領）を通じてバニ・ヤースとの関係を強めていったのである^{viii}。なお、バニ・ヤースはヒナーウィであり、ブライミー・オアシスにおいては、ナイームやバニ・カアブと敵対関係にあるザワーヒルと伝統的に強い関係を有してきた。このように、政治や経済状況の変化は、時に伝統的な部族間の紐帯を上回る、あるいは部族間の連合の組み換えをもたらした

のである。

表 1 : アラブ首長国連邦におけるヒナーウィとガーフィリー

Area	Ghafil	Hinawi
	Tribal Name	Tribal Name
Abu Dhabi	—	Bani Yas Awamir Afar Manasir
Shamailiyah	Naqbiin Kunud Najadat	Bani Yas Awamir Afar Manasir
Buraimi	Naim Al Bu Shamis Bani Ka'b Bani Kotob	Dhawahir
Dhank	Bani Kalbain	Bani Ali
East Braimi	Bani Kalaib	
Dhahirah	—	Balush
North Dhahirah	—	Dhawahir Bani Ghafir Ahabab
Yanqul	—	Bani Ali
Dubai	—	Bani Yas Awamir Afar Manasir
Wadi Hattah	Biduwat	
Sharjah	Qawasim	
Ra's al-Khaimah	Qawasim Dahamina	Bani Za'ab Habus
Hamriyah	All Tribes	—
Hilah	All Tribes	—
Dibbah	All Tribes	—
Ajman	Na'im	—
Daid	Tanajj Mazariah Ghafalah	—
Jili	Tanajj Mazariah Ghafalah	—
Ra's al-Jibal	Dhahuriyin	Shihuh
Unm al-Qaiwain	All Tribes	—
Fujailah	—	Sharqiin

英国はこの地域において、Divide and Rule と呼ばれる手法を用い、最小限の政治・経済的コミュニティを交渉相手として分断し、このコミュニティを政治的に主導する部族や家の長と交渉を行っていった^{ix}。現在のアラブ首長国連邦を構成する地域では、たとえば、アブ・ダビのバニ・ヤース部族のアール・ブー・ファラーハ氏族ナヒヤーン家、ドバイではバニ・ヤース部族のアール・ブー・ファラーサ氏族マクトゥーム家、シャルジャ並びにラアス・ル＝ハイマではカワーシム部族が、それぞれ交渉相手に選ばれ、それぞれの首長家としてのお墨付きを得たのであった。アラブ首長国連邦は 71 年に独立後、石油の富を得て急

速に経済を発展させ、外国人の流入等を始め、大きくその経済と社会を変化させてきた。このような中、アブ・ダビ首長国は、連邦内で突出した石油産出首長国であるにもかかわらず、今でも部族的色彩を色濃く残しているといわれる。なお、ドバイの場合、1930年代に発生した首長家と有力部族間の一連の問題により、首長家は孤立し、結果として部族的色彩は弱くなっていった^x。

このアブ・ダビ首長国においては、バニ・ヤース部族を中心とした政治・経済的連携が伝統的に維持されてきた。18世紀にリワ・オアシスからアブ・ダビ島に移住してきたナヒヤーン家は、この地で天然真珠の採取のための連合の核を作り、内陸部と沿岸部をとり結ぶ部族関係構築に成功した。経済的には、沿岸部で富を得る手段を確保し、内陸部でこれを運用するという手法がとられた。真珠採取や漁業に際しては、船、水先案内人、潜水夫、これらの産品を貿易する人々、等がバニ・ヤース部族を構成する氏族により分担して保有された。たとえば、マラル氏族やマハーイル氏族、マハーリバ氏族の一部は、主として潜水夫や水先案内人を提供してきた。その一方で内陸部のオアシスにおいては、ハワーミル、クバイサートといった氏族が海で得た収益を元に、ナツメヤシやラクダのようなバニ・ヤース部族の共同の資産を預かり、海の部族がオアシスにいない際にはこれらを管理した。さらに、マザーリアやアワーミル氏族は、オアシスと海を結ぶ砂漠の遊牧民として安全を提供し、外部勢力との戦いの際には、軍事力を提供した。政治的には、これらの氏族間でもめごとが発生したり、外部との問題が生じる際には、ナヒヤーン家がしばしばこれを調停・調整した。

このようにバニ・ヤース部族は政治的・経済的な性格を有してきたと言えるが、その一方で、実際にどの程度血縁関係で結ばれているかについては、必ずしも確かではない。たとえば、マハーイル氏族は、独特の方言ヒンミーを現在でも使用する場合があると言われているが、ハドラマウトから来たとも言われる彼らの言葉は、内陸部と沿岸部いずれに居住する他のバニ・ヤースの諸氏族とも異なると言われる^{xi}。また、オメール元石油相はイラン系であるが、婚姻関係によりマハーイル氏族の一員と認められている。ここにおいては、前述のヒッティの指摘、つまり「真実であれ虚構であれ」血を共有しているという信念が重要なようである。

さらに、バニ・ヤース部族を中心とした他の部族との関係もまた、重要であった。ブライミー・オアシスにおいては、バニ・ヤース部族のナツメヤシを管理し、伝統的な連携関係にあるザワーヒル部族が^{xii}、アール・ブー・シャームス部族を含むナイーム部族と激しく争ってきた過去があるが、この構想においては、バニ・ヤース傘下のアワーミル氏族がザワーヒルと共闘し、勢力争いを継続させていった。

3. 石油以降の首長国

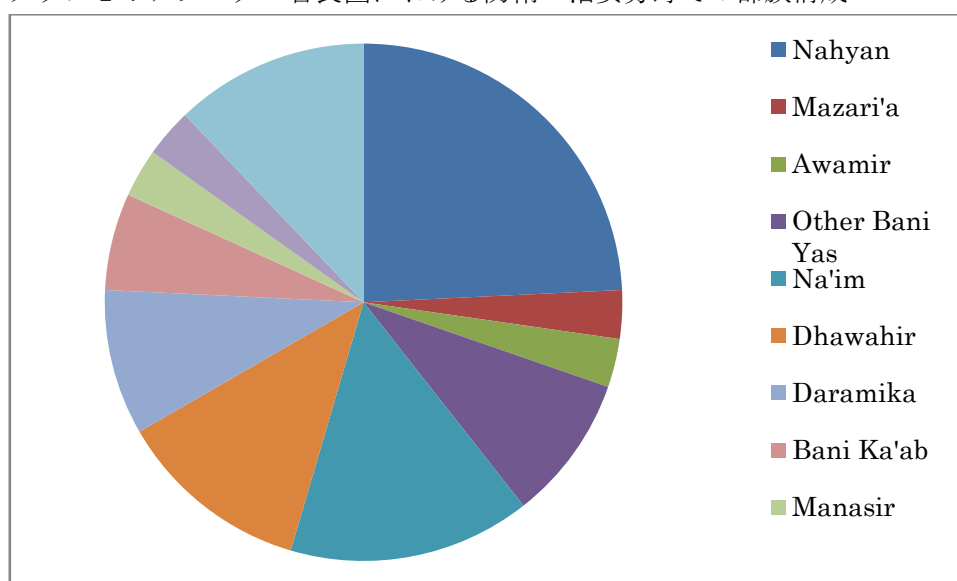
71年の英国のスエズ以東からの撤退を受け、**Divide and Rule** 政策の下、大国のはざまの弱小国として独立を余儀なくされようとしていたアブ・ダビ首長国は、近隣の首長国と

連邦を形成することになった。連邦を形成した後も、アブ・ダビ首長国内の政治・経済分野における要職の多くは、アブ・ダビ出身者によって占められることになったが、かつての分業体制は、独立後のアブ・ダビ首長国においても重要な要素を構成することとなった。

第一に、部族連合の中核をなすバニ・ヤース部族の首長家、ナヒヤーンが首長国の元首となった。独立直後の第一次石油ショックは、石油輸出に頼るこの首長国の財政を潤し、国家収入が激増したことにより、レンティル型のナヒヤーン家統治は大いに強化された。

第二に、首長国内の防衛・治安分野においては、特に顕著な部族連合の秩序の名残を見ることができる。グラフ1は、防衛・治安関係におけるアブ・ダビ首長国の主要な幹部を部族別に分類して示したものである。この分野において登用されている人物は、有力部族出身者が多いのみならず、そのほとんどが、遊牧民もしくは内陸部において、かねてより軍事力に優れてきた部族である。この観点からみると、かねてからの役割分担の秩序は現代にまで引き継がれていると言えよう。その一方で、現代における特徴として挙げられるのは、第一にこの首長国にとって極めて重要な分野において、ナヒヤーン家が要職を占めていることである。第二に、かつてのバニ・ヤース連合とそれに敵対する勢力との区別なく、かねてより軍事力を誇っていた部族が登用され、あるいはしばしば同盟関係部族出身者よりも上の地位に置かれていることである^{xiii}。ザード前大統領が関係を構築したかつて敵対関係にあったナイームやバニ・カアブ部族は、宿命のライバルであるザワーヒル出身者よりもより高い地位に就いている例も見られるのである。これは、ナヒヤーン家の統治が首長国全体に及んでいる、つまり、富と権力を首長家がコントロールしていることを示しているようにおもわれる。そののみならず、かつての部族的な伝統と論理が、現在では希薄になっていることを示唆しているようである。

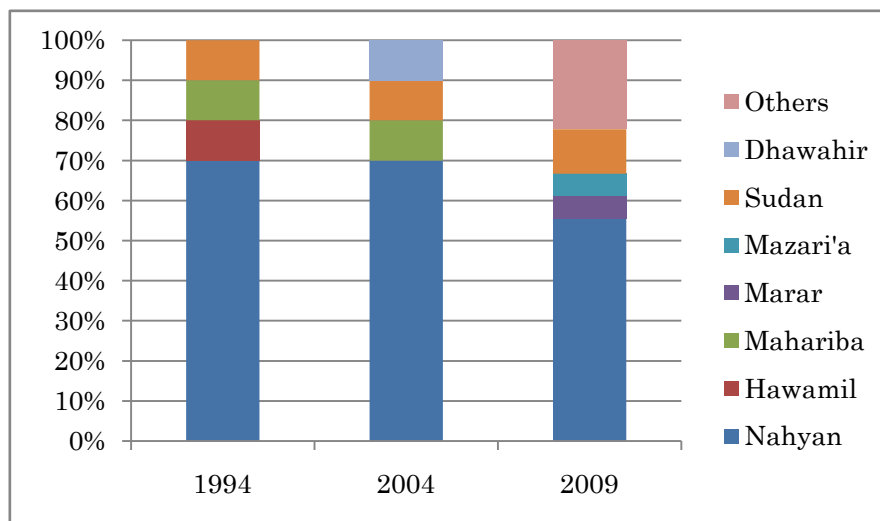
グラフ1：アブ・ダビ首長国における防衛・治安分野での部族構成



第三に政治分野を見てみたい。アブ・ダビ首長国において「議会」と名がつく組織には、首長に次ぐ立法・行政最高機関であるアブ・ダビ執行評議会、首長国全体の勅選議会たるアブ・ダビ諮問評議会、およびアル＝アインの地方諮問評議会（勅選）がある。また、アブ・ダビ首長国を代表して、連邦議会に8名の議員を送り込んでいる。これらの「議会」は、権限等に応じて、異なる部族的論理が働いているようである。

アブ・ダビの政治力学に従えば、最も重要で、国家の内閣のような役割を果たしているのが執行評議会である。この執行評議会には、圧倒的にナヒヤーン家構成員が多い。また、バニ・ヤース部族の構成員は、94年には90%、2009年には約80%を占めている。首長の権限は圧倒的ながら、これは、アブ・ダビの「統治層」がどうなっているかを端的に示していると言えよう。統治層としてのナヒヤーン家の中でも、時代が新しくなるにしたがい重用されているのは、ザード前大統領の子孫である。90年代前半までは、ザードの兄弟たち、タフヌーン、サイフやムハンマドの子息たちが発言権を維持していたが、2000年代に入ると、彼らの権限は低下してきたと言われている。

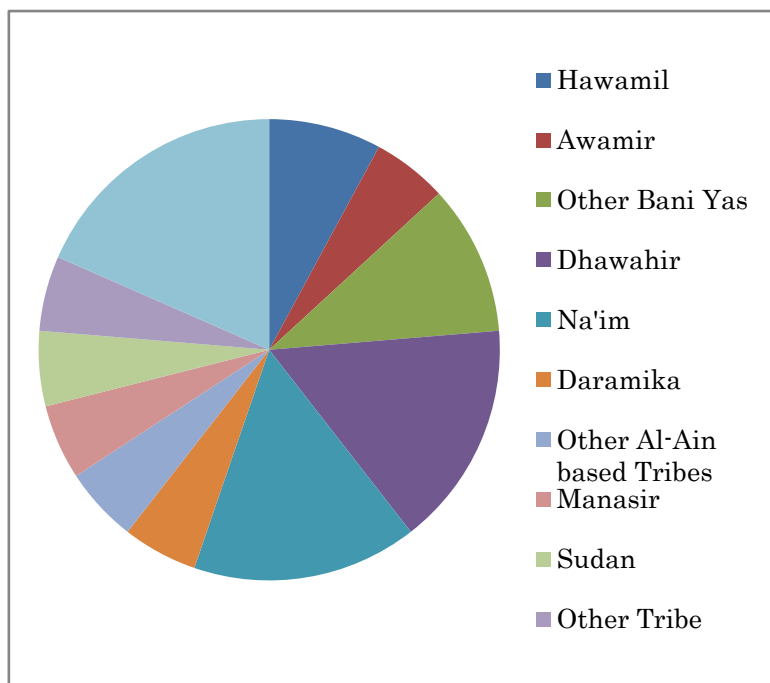
グラフ2：アブ・ダビ執行評議会構成員の部族構成



アブ・ダビの中で、「統治層」とは言えずとも、要人や部族のバランスをより象徴しているのは、アブ・ダビ諮問評議会とアル＝アイン諮問評議会かもしれない。両議会には、ナヒヤーン家は登用されておらず、これは、「統治層」に対する「諮問層」を現わしているようだ。両議会では、主としてアル＝アイン以外のバニ・ヤースから約4分の1、アル＝アインの主要な部族から約3分の1とそれ以外という構成になっている。ここでは、アル＝アインでライバル関係にあったザワーヒルとナイームが同数を占め、アブ・ダビ諮問評議会では、最大の部族ながら独立以降、その重要性を落としてきたマナーシールと、西部州に主たる拠点を有し、ザード以降に文民分野で頭角を現していったスーダーン出身者が同数、任命されている。このそれぞれのバランスは、首長の任命による議会において、伝統

的な部族バランスに対する考慮が働いていた様子が伺われる。

グラフ 3 : アブ・ダビ並びにアル=アイン諮問評議会の部族構成



さらに、連邦国民議会については、アブ・ダビのみならず他の首長国でも、必ずしも部族関係への配慮はうかがわれない。首長家に近い部族からの登用の確率が高いが、2007年にその半数が公選に付されても、選出されたのは首長家に近い部族構成員である。

グラフ 4 : アブ・ダビ首長国選出連邦議会の部族構成

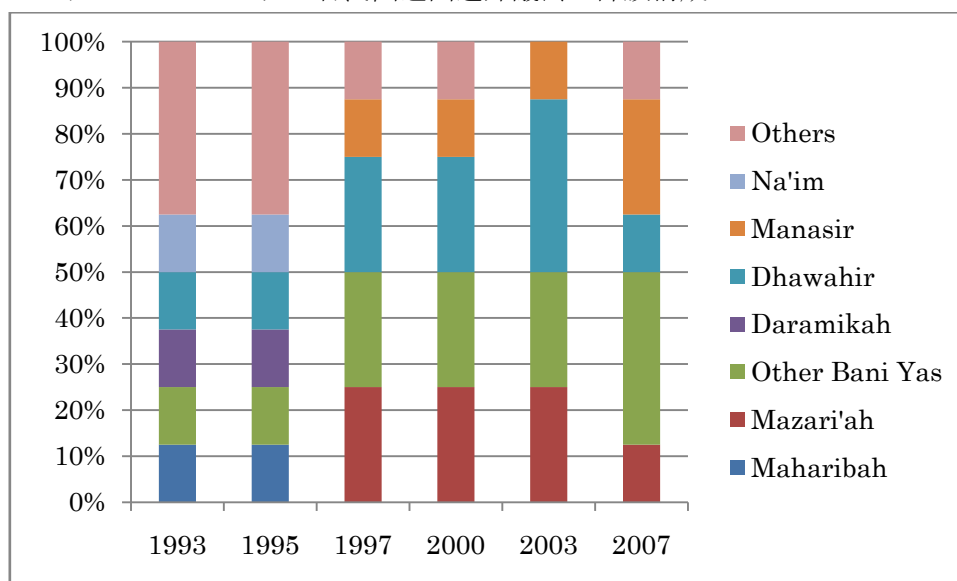


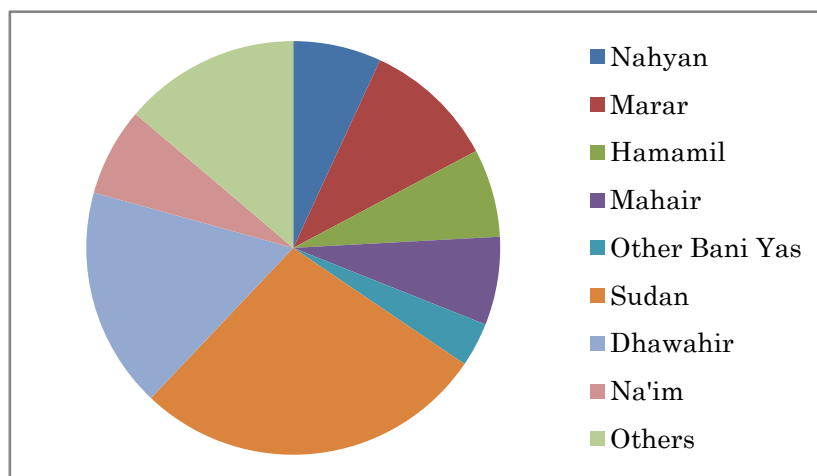
表 2 : 連邦国民議会選出議員の部族構成

2007								
Abu Dhabi	Dhawahir	Manasir	Qubaisat	Marar	Fahim	Manasir	Mazari'ah	Hawamil
Dubai	Ghurair	Sudan	Marar					
Sharjah	Bani Za'ab	Midfa	Naqbi'in	Mahair				
Ajman	Matrousi	Matarish	Sudan					
Ra's al-Khaimah	Tanajj	Na'im						
Fujairah								
Umm al-Qaiwain	Qubaisat							
2003								
Abu Dhabi	Dhawahir	Daramikah	Dhawahir	Daramikah	Manasir	Dhawahir	Mazari'ah	Mazari'ah
Dubai	Sudan	Nabudah	Al Nahiyah	Mullah	Dalmuk			
Sharjah	Sudan	Bani Za'ab						
Ajman	Na'im	Mahair	Muwajji					
Ra's al-Khaimah	Dhawahir	Na'im	Naqbi'in					
Fujairah	Sharqiin							
Umm al-Qaiwain								
2000								
Abu Dhabi	Daramikah	Dhawahir	Manasir	Daramikah	Dhawahir	Mazari'ah	Mazari'ah	
Dubai	Dalmuk	Sudan	Ghurair					
Sharjah	Sudan	Bani Za'ab						
Ajman	Mahair							
Ra's al-Khaimah	Dhawahir	Qawasim	Na'im					
Fujairah	Sharqiin							
Umm al-Qaiwain								
1997								
Abu Dhabi	Mazari'ah	Daramikah	Dhawahir	Manasir	Daramikah	Dhawahir	Mazari'ah	
Dubai	Sudan	Dalmuk						
Sharjah	Bani Za'ab	Na'im						
Ajman	Mahair	Muwajji						
Ra's al-Khaimah	Na'im	Qawasim						
Fujairah	Sharqiin							
Umm al-Qaiwain								
1995								
Abu Dhabi	Mahariba	Mazari'ah	Dhawahir	Na'im	Marar			
Dubai	Dalmuk	Sudan						
Sharjah	Bani Za'ab							
Ajman	Mahair	Muwajji						
Ra's al-Khaimah	Shihuh							
Fujairah	Sharqiin							
Umm al-Qaiwain								
1993								
Abu Dhabi	Mahariba	Dhawahir	Mazari'ah	Marar	Na'im			
Dubai	Dalmuk	Sudan						
Sharjah	Bani Za'ab							
Ajman	Mahair	Muwajji						
Ra's al-Khaimah	Shihuh							
Fujairah	Sharqiin	Na'im						
Umm al-Qaiwain								

さらに、アブ・ダビ首長国を代表する、いわば「花形産業」である石油関係後者の幹部について見ると、ナヒヤーン家を含む有名部族出身者が多いものの、3つの傾向が見て取れる。第一に、政治や治安分野と比較して、必ずしも有名と言えない部族や所属部族が不明な者たちが多いことである。また、首長国の基幹産業であるにもかかわらず、ナヒヤーン家出身者が極めて少ない。これは、部族よりも教育レベルや能力がより重視されていることを示しているように思われる。第二に、内陸部の部族出身者よりも海に近い地域に居住する部族出身者が多いことである。一般論として、内陸部の部族は保守的と言われるところ、比較的新しい産業たる石油産業に順応してきた部族は、海に近い地域に居住するものが多いのかもしれない。この意味でも、石油分野においては、部族的論理は一定にとどまっているように見える。第三に、沿岸部に勢力を有する部族の中でも、かねてより首長家と重要な関係を築いてきたマナーシールのような部族より、近年になって台頭を現してきたスーダーンのような部族の方が目立つことである。これはつまり、石油分野において

は、部族的なしがらみから比較的自由であり、この分野においては、出世が許されていることが部族の中で理解されていることを示しているようである。

グラフ5：アブ・ダビ首長国における石油分野における部族構成



このように、独立から20年を経たアブ・ダビ首長国連邦の部族を見てみると、以下のことが指摘できるように思われる。

- 現在でも部族的な色彩は色濃く残っている。
- 歴史的な部族関係よりも、近現代における経済や政治を基礎とした結びつきは、しばしば部族の論理を上回っている。
- 首長国内の産業別部族構成を見ると、分野においては部族の論理が、他の分野においては新たな秩序が優先され、首長国内での新旧の論理をバランスさせている。
- 首長家の力は、他の部族と比較して、さらに大きくなっている。

このように見てくると、古い体質を残しているように見えるアブ・ダビ首長国ではあるが、部族連合や部族間の論理には変質も見られるようである一方、単純にすべての分野において古めかしい部族的論理は駆逐されつつあるとも断言できないようである。2000年代以降の更なる研究は必要ではあろうが、いずれにせよ、アブ・ダビ首長国における部族関係については、きめ細かい分析が必要なものと思われる。

i ヒッティ・K・フィリップ、*アラブの歴史*、岩永博訳、講談社学術文庫、東京、1982、84p

ii トルーシャル・オマーンの部族を糾合してポルトガルを排斥したヤアーリバ王朝は、イマームの後継問題を巡って内戦に突入した。バニ・ガーフィルのタミーマ（部族長）であったムハンマド・ビン・ナーセルに対し、幼少のイマームの血統を推したバニ・ヒナが異議を唱え、この争いはすべてのこの地域の部族を二分した。カフターンに属するバニ・ヒナ部族は、歴史的・地理的経緯から多くのカフターンの系譜を共有する部族とヒナーウィ連合を形成した。逆にアドナーンに属するバニ・ガーフィル部族は、アドナーンの系譜を共

有する部族とガーフィリー連合を形成し、この抗争はペルシャの影響力の伸長および現在のオマーンを率いるアール・ブー・サイード王朝（ヒナーウイ）の成立に至るまで継続するこの地域における大きな歴史的な出来事になった。Heard-Bey, Frauke, *From Trucial States to United Arab Emirates*, Longman, London, 1982, 273-275pp

iii Carter, J R L. *Tribes in Oman*, Peninsular Publishing, London, 1982, 12p

iv Abu al-Hajjaj, Youssef ed., *Dawlat al-'Ashirah al-'Arabiyah al-Muttahidah, Ma'had al-Buhuth wal-Dirasah al-'Arabiyah*, Cairo, 1978, 539p

v ワスムについては、たとえばドゥルウ部族に見られるように、部族内で共有するものの他に、一部の家が別のワスムを用いている場合もある。Carter, 34p

vi 一般には、アール・ブー・シャームスはナイーム部族の構成員と考えられている。

vii たとえばそれは、ナイームやアール・ブー・シャームスによる、20世紀中ごろにザーヒラの「王」を一時期自称したバニ・ガーフィルのタミーマ、スレイマーン・ビン・ヒムヤールへの忠誠として語られた。

viii Wilkinson, John C., *Arabia's Frontiers The Story of Britain's Boundary Drawing in Desert*, I.B.Tauris, London, 1991, 250-253pp

ix Zahlan, Rosemarie Said, *The Origin of the United Arab Emirates*, St. Martin's Press, New York, 1978, 5p

x ドバイ首長国におけるこの時期の一連の問題については、拙稿、「商人と首長家～アブ・ダビとドバイにおける部族的社会とその変遷」、日本中東学界年報 1995 年第 10 号、165-168pp ご参照。

xi Heard-Bey, 412-413pp

xii Heard-Bey, 38p

xiii 個別の役職については、別添表 3 を参照されたい。